

浦幌町開拓獅子舞（浦幌町無形民俗文化財）

山村 照雄

▼はじめに

私達、浦幌町文化協会所属吉野小型映画クラブ（会長齊藤隆夫）が、浦幌町に60有余年の間伝承されている浦幌町無形民俗文化財「開拓獅子舞」を題材として、町教育委員会、保存会の方々の協力を得て製作した映画「開拓獅子舞」（上映時間30分）について資料・取材をもとに獅子舞の歴史の一端を紹介します。

▼浦幌町の誕生と開拓移住者

明治13年2月、大津村に戸長役場が置かれ、浦幌町（当時生剛村）もその管轄下におかれていだが、当時はアイヌ族のみで和人の住んでいた形跡は認められていない。大津村に戸長役場が開かれてからしばらくした明治28～9年に相当数の和人移住者が渡来し開墾が始められた。それが、当時、本町として最も力を注いだといわれる土田農場である。場主は土田氏で茨城県人である関係から、最初は茨城県で募集した人々を入村させたが余り好成績を納めることができず、当時、農場管理者であった土田庫吉氏の依頼を受けた君貞次氏（新潟県新発田の人、若い頃は東京に出て酪農を修業した人と言われる）が、石川県、富山県から91戸800余名を一度に募集入植させ大仕掛けの開墾に着手した。これ等の人達は、明治30年3月19日石川県伏木港に集結（船便の都合で2～3日滞在）同月22日加能丸（トン数不明）で800余名の人々が出発、途中酒田港に寄港、室蘭に仮泊して3月28日大津港に到着した。

そこから海岸伝いに十勝太に出て浦幌川と十勝川（旧十勝川）の合流地点から氷結する十勝川を

渡り、更に浦幌川の氷上を渡って土田農場事務所に到着した。その日には、黒大豆入りの握り飯が事務所から給与されたと言う。事務所は西1線南10号附近で約30坪の建物であった。

入植者の大部分の人々は2間に3間の草葺小屋が与えられたという。入植と同時に開墾が始まられ、翌年の暮には、現在の万年の山の中腹に八幡神社（現在は移転）が建立され、明治32年4月に豊作を祈願する初めての春祭りが行われ年を重ねると共に祭りも盛んになっていった。

土田農場は、現在の生剛、統太一帯で、生剛は当時三村戸長役場が置かれたところで、浦幌町發祥の地である。本町が（当時浦幌村）が大津から独立したのは明治33年である。その頃は、役場、学校、警察、郵便局、病院等の公共の建物や商店旅館等も漸時整って市街地を形成していたが、その後、鉄道の開通、内陸奥地の開発に伴い市街が移動し現在では単に旧市街のあったところという歴史的存在となり今では全部が農耕地となっている。

▼開拓獅子舞の誕生

開拓から年を重ねる内に安住の地としての将来も明るくなり、八幡神社の祭りも年と共に盛んになって来たが、開拓の苦労そして望郷の念に心を痛める人達も少くはなかった。その人達に少しでも心の支えになればと、郷里で棒ぶりの経験のあった笹川平次郎氏が先生棒となり、麻生善右衛門氏等が部落の人達に図り、明治35年の秋祭りに郷里（富山県）の獅子舞をまねて獅子舞を八幡神社に奉納し郷里を思い出し明日への活力にした。

目 次

浦幌町開拓獅子舞（浦幌町無形民俗文化財）	山村照雄	2
霧止山チャシ跡について	後藤秀彦・佐藤芳雄	3
浦幌町における蝶類の出現期 —— 特にジャノメチョウ科について ——	円子紳一	6
チャシ跡関係文献目録 —— 1890年～1977年 ——	後藤秀彦編	8

表紙写真：浦幌町字十勝太所在の十勝川口チャシ跡。十勝川河口に面し周囲に擦文期聚落跡が広がる。

これが浦幌町開拓獅子舞の起源である。当時の獅子舞は、獅子頭は「ザル」を利用し、目、鼻は「イモ」あるいは墨で書き、耳は「カボチャ」で形を作り麻で結び、胴体は南京袋を縫い合せて作り、中で踊る人は5～6人であった。

明治37年、富山県の人「空萬藏」という大工さんが、この獅子舞を見て感動し「ワタドロ」の木に獅子頭を彫刻して奉納した。この獅子頭で獅子舞も年々盛大になり祭りばかりではなく、学校の落成式やお寺、その他の特別な行事がある時は遠くまで出かけて行き祝の獅子舞をするまでになった。空萬藏氏の彫刻した獅子頭は、東山にある郷土博物館に大切に保存されている。

その後、笹川、麻生両氏が転出してから、しばらくの間下火になったが、大正7年頃から万年の森川喜助、角尾勝太郎の両氏が先生棒となり、中西与作、角尾善師、下坂与吉の各氏と共に、開拓当時をしのぐ盛大な獅子舞が昭和16年頃まで続けられた。

しかし、太平洋戦争の勃発により、兵役に服する人も多くなり、指導者であった中西、下坂、角尾の各氏も他村に転居したりして止むなく休止の状態が続いた。終戦後、赤部順壱氏の奔走によって帰町した大正時代の指導者、棒の中西与作、笛の下坂与吉、槍の森理吉、中西与蔵、森宗太郎の各氏と図り開拓当時より続く獅子舞を更に盛大なものにし、新しい町づくりに供したいと昭和21年の秋祭りに40歳～50歳のこの人達が中心となり、戦後始めての獅子舞を始めた。翌22年には、開拓当時のあらゆる苦労を秘めたこの立派な獅子舞を後世に伝承するには、若い人達の育成をしなけれ

ばならないと指導に務めた。しかし、職業上の事情もあり充分な練習が出来ず、後継者の育成には大変苦慮したようである。昭和26年頃には、浦幌中学校の希望者を集め獅子舞を続けたこともある。昭和32年、飯山耿郎氏の協力を得て、飯山鉛筆工場の従業員を動員し、万年及び住吉町の有志と共に更に伝承に努める。

60余年の間、いろいろな苦難とたたかしながら本町在住の有志により伝承されて来た開拓獅子舞を、本町の文化芸術として保護し、末長く継承して行くことが先人の開拓の遺業を偲び更に開拓の尊い精神を後世に伝えることにもなるということで、昭和39年2月、有志により浦幌町開拓獅子舞保存会が発足し、衣装、笛、太鼓等を新調更新し、裘いも新たにし益々盛大になった。

この頃より、十勝管内の祭典行事等に再々出向き浦幌町の開拓獅子舞を紹介披露している。またNHK-TVの「ふる郷の歌祭り」にも出演し全国に紹介される。

昭和40年3月には、浦幌町無形文化財第1号に指定され、今後永久に保存されるに至った。これも、開拓当時から伝承に努めて来られた先輩指導者の並々ならぬ苦労と努力があればこそである。

現在、万年を中心とする40代50代の指導者の下で20代の人達が立派に保存のため努力している。開拓獅子舞は、この様に保存会の方々の熱意ある努力により立派に保存されているが、我々町民一人一人が郷土が生んだ誇りある郷土芸能に深い感心をもち永久に受け継がれていくよう惜しみない協力をしていかなければならぬ。

(吉野小型映画クラブ事務局長)

霧止山チャシ跡について

後藤秀彦^{*}・佐藤芳雄^{**}

I
霧止山チャシ跡は、浦幌町字共栄と同町字直別を結ぶ旧国道38号線の霧止峠（標高96.3m）の南西約500mに所在する。行政区画上の所在地は、北海道十勝郡浦幌町字昆布刈石1番地7号である。

チャシ跡は、極めて深い山中に存し、北東方向になだらかに突出した半島状の尾根の基部に二条の直線壕を掘削しただけの単純なものである。チ

ヤシの両袖は、深い沢となって急傾斜で谷底に落ち込んでいる。標高105m。比高35m。

壕の長さは双方とも10mで、壕間は15mある。したがって、壕によって区切られた郭内の平坦部は10m×15mの長方形となっている。壕の深さは1m内外で、壕の両側にわずかに盛土が認められるが、壕掘削の際の土砂の多くは両袖の深い沢へ廃棄されたものと考えられる。